



Title	デンマーク語に見られる {名詞既知形+制限的關係節} の使用について
Author(s)	大辺, 理恵
Citation	IDUN -北欧研究-. 2005, 16, p. 25-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語に見られる {名詞既知形+制限的關係節}の使用について

大辺 理恵

1. 序

デンマーク語の制限的關係節には、先行詞が“定”であり、また形容詞を伴わない場合に、その先行詞を限定する方法として2種類見られる。¹ 1つは、指示代名詞 (den/det/de) を用いて先行詞を限定する方法であり、以下{指示代名詞+名詞}と示し、制限的關係節を含む場合は{指示代名詞+名詞+制限的關係節}と示す。もう1つは、名詞既知形を用いて先行詞を限定する方法であり、以下{名詞既知形}と示し、制限的關係節を含む場合は、{名詞既知形+制限的關係節}と示す。

日本でデンマーク語を学んできた筆者は、制限的關係節の先行詞としては{指示代名詞+名詞}を用いることが一般的であるとの説明を受けてきたのだが、実際デンマーク語に触れる際には、{名詞既知形+制限的關係節}を目にする場合もある。しかし、同時に{名詞既知形+制限的關係節}という構造は、{指示代名詞+名詞+制限的關係節}という構造に比べれば、使用頻度が少ないということも事実である。²

制限的關係節の先行詞としては、{名詞既知形}よりも{指示代名詞+名詞}が一般的であることは、デンマーク語の文法書における記述からもある程度確認できる。Diderichsen (1970) や Fischer-Hansen & Kledal (2001) は{名詞既知形+制限的關係節}という構造にすら言及していないし、Thorborg (1996: 65) では、「制限的關係節の先行詞は{指示代名詞+名詞}で示され、{名詞既知形}は用いない。」としている。³ また{名詞既知形+制限的關係節}について扱っている文法書においても、後に§2で詳しく確認するが、決して{名詞既知形+制限的關係節}を積極的に支持しているとは思われない。

ただ、Kristiansen *et al.* (1996: 112) は{名詞既知形+制限的關係節}に関して次のように述べている。

Der er i gymnasieelevers og andre unges skriftlige dansk en vis tendens til at bruge bestemt form også når der er tale om en restriktiv relativsætning:

〈ギムナシオムに通う生徒や、他の若者のデンマーク語の書き言葉において、制限的關係節の場合においても、既知形を用いるある程度の傾向がある。〉

そして、次のような例文を挙げて、{指示代名詞+名詞+制限的關係節}と比較

している。

‘I det første fortumlede års tid var der endnu mulighed for at mødes med dissidenterne han sad i fængsel med...’ (sammenlign: ‘... de dissidenter han sad i fængsel med’)⁴

く「目も回るような最初の年には、彼が刑務所で一緒だった反乱分子たち [dissidenterne han sad i fængsel med = {名詞既知形+制限的關係節}: 筆者付記] と会う機会もまだあった…」(比較せよ: 「彼が刑務所で一緒だった反乱分子たち」 [de dissidenter han sad i fængsel med = {指示代名詞+名詞+制限的關係節}: 筆者付記])⁵

‘Teksten som jeg vil behandle ...’ (sammenlign: ‘Den tekst som jeg vil behandle...’).

く「私が扱いたいテキスト [teksten som jeg vil behandle = {名詞既知形+制限的關係節}: 筆者付記] は、…」(比較せよ: 「私が扱いたいテキスト」 [Den tekst som jeg vil behandle = {指示代名詞+名詞+制限的關係節}: 筆者付記] は、…))

この記述から、彼らの主張が「{名詞既知形+制限的關係節}は若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」ということであると考えられる。⁶

また、実際にそのような解釈をして、Andersen (2004: 25) は次のように述べている。

Omvendt findes der, som retningslinje, for de restriktive relativsætninger en regel om at foranstillet bestemt artikel på det substantiv som relativsætningen lægger sig til, angiver at der er tale om en restriktiv relativsætning, men der har vist sig (se Frans Gregersen i Dansk Sproglære 1996, s 112) en tendens hos unge mennesker til her ikke at skelne mellem foranstillet og efterstillet artikel;

く反対に、規範としてではあるが、制限的關係節については、關係節がかかっている名詞に付く前置定冠詞は、制限的關係節が扱われていることを示すという決まりが存在する、しかしこの場合に、若者の間に前置定冠詞と後置定冠詞の違いを区別しないという傾向が現われてきた。

(Dansk Sproglære (1996: 112) における Frans Gregersen の記述を参照).>

しかし、「{名詞既知形+制限的關係節}は若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」という彼らの主張は、本当に事実なのであろうか。また、{名詞既知形+制限的關係節}が若者の間で使用される構造であるということから、{名詞既知形+制限的關係節}の使用頻度が{指示代名詞+名詞+制限的關係節}に比べて少ない、というように考えることは可能であらうか。

本稿では、{名詞既知形+制限的關係節}を扱っているデンマーク語の文法書に言及しながら、19世紀そしてそれ以降に書かれたデンマーク語のテキストから{名詞既知形+制限的關係節}の例文を見つけ出し、19世紀そしてそれ以降のデンマーク語でも{名詞既知形+制限的關係節}が使用されていたことを証明する。そしてその事実をもって、Kristiansen *et al.* (1996: 112) や Andersen (2004: 25) の、「{名詞既知形+制限的關係節}は、若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」という主張は事実とは異なり、さらにその主張が{名詞既知形+制限的關係節}の使用が{指示代名詞+名詞+制限的關係節}に比べて頻度が少ないということの説明としても十分ではないことを明らかにしたい。

2. デンマーク語の文法書による{名詞既知形+制限的關係節}に関する記述

デンマーク語の文法書において{名詞既知形+制限的關係節}について触れているものでは、Mikkelsen (1975 (1911): 192) が次のように述べている。

Den bestemte form eller det bestemte kendeord står undertiden i stedet for det påpegende henvisningord *den*. Dette finder især sted foran henførelsesbisætninger, f. eks. *Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt* (for *de penge, han dengang fik*).

<名詞既知形あるいは定冠詞[ここでは独立定冠詞を指すと考えられる：筆者付記]は、時々*den*などの指示代名詞に代わって使用されることがある。このことは特に關係節の前で起こる、例えば、*Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt* <彼がそのときもらったお金は、彼はもう使ってしまった。> (*de penge, han dengang fik* <彼がそのときもらったお金>の代わりに)>

また、Lefolii (1906: 131) は、制限的關係節の先行詞の形態について触れている箇所、次のように述べている。

..., nemlig enten uden nogen som helst bestemmelse eller med det simple pegeord “den, det, de” pegende hen på det andet udsagn – undertiden findes isteden herfor et navneord i bestemmelsesform;

<…すなわち、いかなる修飾語も伴っていないか、あるいはもう1つの陳述を指し示す役割をしている短い指示代名詞“den, det, de”を伴っているかである。しかし時折これらの指示代名詞のかわりに名詞既知形が見られる；>

そして次のような例文を挙げている。

“Det er nu meget bedre med mine knæer; i den sidste uge har jeg for det meste kunnet rejse mig fra *stolen jeg har siddet på*, ikke blot uden andres hjælp,

men også uden at støtte mig med albuen til *bordet jeg har siddet ved.*”

くひざの状態は前に比べてもはるかに良いですよ、先週は自分の座っている椅子から立ち上がることがたいていの場合はできました、他人の助けを借りないだけでなく、自分がそばに座っている机にひじをついて自分を支えることもせずにです。>

さらに、Hansen (1927: 48) は名詞既知形の後方照応の機能について述べている箇所、次のように述べている。

Denne form for bestemthed forekommer ogsaa, om end sjældnere end den anaforske og den situationsbestemte, i det ældste lovsprog:

<名詞既知形におけるこの種類[決定詞的なすなわち後方照応の機能を持つもの：筆者付記]は、名詞既知形の前方照応や外部照応に比べれば珍しいとしても、最古層の法律の言語にも現れている。>

そしてユラン法から次のような例を挙げている。

bondoen thøer ham fœller <彼を訴える農民>⁷

これまでに挙げた文法書の記述を見ても明らかなように、{名詞既知形+制限的關係節}という構造については、今から約 100 年前に書かれた Lefolii (1906: 131) においても、また Mikkelsen (1911: 192) においても既にその存在が認められている。また、Hansen (1927: 48) にいたっては、今から 700 年以上前のユラン法においてもその存在が認められるということが示されている。

また比較的最近に書かれた文献の中でも{名詞既知形+制限的關係節}について触れているものがあるが、Pedersen (1988: 52-53) は次のような指摘をしている。

Danish favours demonstrative + noun when followed by a restrictive relative clause, rather than noun + enclitic article + relative: ‘den mand, jeg så’ rather than ‘manden, jeg så’. However, in my material there are several examples of the latter construction. As similar examples do occur in original Danish texts it is impossible to say to what extent their occurrence in translation is determined by the form of the SL utterance, but it is obvious that influence from other languages, notably English and French, is at the moment helping this construction to spread:

<デンマーク語は制限的關係節が後続する場合は、名詞+後置定冠詞[{名詞+後置定冠詞}={名詞既知形}を指す：筆者付記]+關係節よりも、指示代名詞+名詞の方を好む、つまり、‘manden, jeg så’よりも、‘den mand, jeg så’を好むのである。しかしながら、私の資料では、後者[={名詞+後置定冠詞+關係節}：筆者付記]の例がいくつかある。同様の例が、デンマーク語が原語であるテキストで実際に生じているので、翻訳にお

けるこれらの出現がどの程度、起点言語の発話の形態によって決定されているのかを述べることは不可能である、しかし他言語、特に英語とフランス語からの影響が今のところこの構造を広めることに一役買っているのは明らかである。〉

さらに、彼の主張に反論するかたちで、Jacobsen (1994: 17) は次のように指摘している。

Bedømmelsen af de nævnte konstruktioner har primært relevans i tekster der er oversat fra engelsk og her vil der utvivlsomt blive slået hårdt ned på dem. I det omfang lignende konstruktioner forekommer i tekster der ikke har engelsk forlæg, og som i øvrigt ikke er præget af anglicismer, må de formentlig betragtes som genuine danske konstruktioner, som der naturligvis ikke er grund til at gribe ind over for.

〈言及した構造 [Jacobsen は、Pedersen が英語からの影響が見られると主張するデンマーク語の統語構造について、複数の構造を例として挙げているが、そのうちの 1 例が {名詞既知形 + 制限的關係節} の構造を含んでいる: 筆者付記] が実際に英語からの影響によるものかどうかという判断は、主として、英語から訳されたテキストの場合に該当する、その場合はそれらの構造は間違いなく批難されるであろう。同様の構造が、英語を原本とせず、その上英語の特徴を持たないようなテキストにおいて、生じているのであれば、それらの構造はおそらく、デンマーク語本来の構造だと見なされる必要があるだろう、したがってそれらの構造に対して介入する理由は、当然のことながら存在しない。〉

Pedersen と Jacobsen の間の議論は、現代のデンマーク語について扱っているのだが、彼らは {名詞既知形 + 制限的關係節} の使用が若者に限定されているような記述はしていない。そして Pedersen が、{名詞既知形 + 制限的關係節} の使用が他言語の影響によって広まっていることを主張していることから考えても、まずは {名詞既知形 + 制限的關係節} はデンマーク語に一般に存在する構造だと考えることができるのではないだろうか。さらに言うならば、彼らの間で起こっている {名詞既知形 + 制限的關係節} の使用に関する議論自体が、{名詞既知形 + 制限的關係節} の使用が、若者の間だけではなく、デンマーク語に一般に存在するということを証明していると考えられるだろう。

これらの文法書の記述から考えても、Kristiansen *et al.* (1996: 112) や Andersen (2004: 25) における、「{名詞既知形 + 制限的關係節} は、若者の間で使用されるある程度の傾向がある」という主張は、事実とは異なっていると考えられるし、また {名詞既知形 + 制限的關係節} の使用頻度が {指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節}

に比べて少ないことに対する説明としても十分であるとは言えないであろう。

3. 19 世紀そしてそれ以降に書かれたデンマーク語における {名詞既知形+制限的關係節}

{名詞既知形+制限的關係節} の使用が現代に限ったものではないということを確認するために、19 世紀そしてそれ以降に書かれたデンマーク語のテキストの中での {指示代名詞+名詞+制限的關係節} と {名詞既知形+制限的關係節} の使用について調べてみた。

結果は以下の表に示した通りである。

作品	制限的關係節を含む例文	先行詞が {指示代名詞+名詞} である例文	先行詞が {名詞既知形} である例文
A	98	50 (51%)	48 (49%)
B	276	171 (62%)	105 (38%)
C	144	108 (76%)	36 (24%)
D	224	187 (83%)	37 (17%)
E	62	50 (81%)	12 (19%)
F	96	80 (83%)	16 (17%)
G	150	134 (89%)	16 (11%)
H	68	60 (88%)	8 (12%)
I	77	58 (75%)	19 (25%)
J	54	49 (91%)	5 (9%)
K	56	50 (88%)	6 (12%)

— 作品名一覧 —

A : Andersen, H. C. 1971. *H. C. Andersens Dagbøger*. [1825～1834 の日記]⁸

B : Andersen, H. C. 1963-1990. *H. C. Andersens eventyr*.⁹ [1835～1872 に発表された作品]

C : Goldschmidt, Meir. 1987. *M. A. Goldschmidts Dagbøger*. [1843～1874 の日記]

D : Goldschmidt, Meir. 1964 (1877). *Livs Erindringer og Resultater*.

E : Bang, Herman. 1983. *Reportager*. [1879～1897 に発表された記事]

F : Bang, Herman. 1997 (1898 / 1901). *Det hvide hus Det graa hus*.

G : Larsen, Johannes Anker. 1925. *Martha og Maria*.

H : Scherfig, Hans. 1940. *Det forsmønte forår*.

I : Bodelsen, Anders. 1969. *Frysepunktet*.

J : Christensen, Martha. 1989. *Manden, som ville ingen ondt...*

K : Hansen, Morten. 2000. *Søllerød blues*.

結果として、例文収集の対象に選んだ上記 11 作品の全ての作品で{名詞既知形+制限的關係節}が使用されていることが確認できた。{名詞既知形+制限的關係節}の使用は、作品ごとに差があるにしろ、{指示代名詞+名詞+制限的關係節}に比べると、やはり少ないようである。¹⁰ しかし、{名詞既知形+制限的關係節}という構造が、19 世紀前半から既に存在し、その時点で少なからぬ頻度を有していたということは確かである。また、作者の出身地を考慮しても、デンマークのある地域に偏っているということではなく、{名詞既知形+制限的關係節}の使用がデンマークのある特定の方言に限定されているとも思えない。¹¹ したがって{名詞既知形+制限的關係節}の使用は、デンマーク語に一般に見られるものと考えて差し支えないように思われる。

以下、それぞれの作品において使用されている{名詞既知形+制限的關係節}の例を数例ずつ検証していきたい。また、本稿末に付した APPENDIX には全例文を示す。

3.1. {名詞既知形+制限的關係節}を含む例文

まず、作品 A における例文において、{名詞既知形+制限的關係節}を含む名詞句をイタリック体で示し、なぜその關係節が制限的關係節であると考えられるか、その理由を示す。

- (1) Jeg vandrede ene mellem de herlige Malerier medens mit Øre inddrak *Musikken, som tonede nede fra Pladsen*. (A 388: 15-17)¹²

〈私は一人で見事な絵画の間を行ったり来たりしていた、耳では下の広場から流れる音楽を聴きながら。〉

対象となる名詞句：*Musikken, som tonede nede fra Pladsen*

som 以下が制限的關係節と考えられる理由：例文 (1) の前には、som 以下の關係節を省いた状態で、先行詞 *Musikken* がどの音楽を指すのかが分かるような、つまり同定するに足るだけの記述が見当たらないので、som 以下の關係節は必要であり、省くことはできないと考えられる。

同様の理由から以下の例文も{名詞既知形+制限的關係節}を含むと考えられる。

- (2) ...og de vare alle saa nydelige imod hende, især *Blomsterne, der havde ligget i hendes Seng*; (B I 48: 26-28)¹³

〈…そして彼ら（＝花たち）は皆彼女にとっても親切だった、特に彼女のベ

ッドで寝ていた花たちは。

- (3) Nogle faa Skridt borte tilvenstre staaer Bordet, hvor vi sad sidste Aften. (C 383: 1-2)
 <数歩左に離れたところに、昨晚私たちが座ったテーブルがある。>
- (4) Opgaven, som livet stiller, er ikke, at ... (D 204: 7)
 <人生が課す課題は、…ということではない。>
- (5) Han er altid manden, manden, som begynder den nye uge med at komme drukken hjem efter at have soldet den gamles fortjeneste op; (E 74: 27-29)
 <彼は常に、親の稼ぎを浪費して酔っ払って家に帰ってくることで新しい週を始めるような男です。>
- (6) Det var Tiden, hvor Dukkerne kom frem. (F 17: 1)
 <それは、人形たちが出てくる時間だった。>
- (7) Lidt efter hørte hun dem komme igen sammen med Claudines børn, som vilde se stedet, hvor det var sket. (G 40: 39-40)
 <少し後で、彼女は彼らが Claudine の子供たちと一緒に再びやってくるのが聞こえた、子供たちはそれが起きた場所を見たかったのだった。>
- (8) Og nu er tiden kommet, da man kan gå til bords. (H 40: 5)
 <そして食卓についてもよい時間になりました。>
- (9) Samtalen gik i stå på den korte tur til opgangen hvor hun skulle af. (I 11: 26-27)
 <会話は、彼女が降りることになっていた棟の階段までの短いドライブの間、止んだ。>
- (10) Han begyndte at kringe rundt efter arbejdstid i kvarteret, hvor han boede. (J 85: 11-12)
 <彼は、仕事の後で、自分が住んでいる地区で問題に対処して回り始めた。>
- (11) Alle folk var så flinke herude, de andre ved bordet, manden der havde hjulpet mig, alle. (K 69: 26-28)
 <ここでは人々は皆、いい人だった、テーブルのそばのほかの人たちも、僕を助けてくれた男の人も、皆。>

デンマーク語では、関係代名詞 som が関係節中から省略されている場合は、その関係節は制限的關係節だと考えることができる。¹⁴ 以下では、{名詞既知形+制限的關係節}において、関係代名詞 som が省略されている例文を挙げていく。

- (12) Alt fik samme Farve som Glassene man saae igjennem. (A 131: 7-8)
 <あらゆるものが、中が透けて見えるガラスと同じ色になった。>

対象となる名詞句：Glassene man saae igjennem

som 以下が制限的關係節と考えられる理由：1. 対象となる名詞句において、関係

代名詞 *som* が省略されていることが確認できる。2. 例文 (12) では, *man* 以下の関係節を省くと, 先行詞 *Glassene* は前の文脈から同定することになり, その場合 *Glassene* が指示するものは, *Glassene man saae igjennem* とは異なってくる。したがって, *man* 以下の関係節は必要であり, 省略することはできないと考えられる。

- (13) ...*min Moder gjorde Ild, stegte Løgene, hun bragte med, ...* (B IV 38: 5-6)

〈…母は, 火をおこして, 持ってきた玉ねぎを炒めて, …〉

対象となる名詞句: *Løgene, hun bragte med*

hun 以下が制限的關係節と考えられる理由: 1. 対象となる名詞句において, 關係代名詞 *som* が省略されていることが確認できる。2. 關係節を省いた場合, 先行詞を文脈によって同定することはできないので, *hun* 以下の關係節は必要であり, 省略することはできない。

例文 (13) と同様の理由から, 以下の例文も {名詞既知形 + 制限的關係節} を含むと考えられる。

- (14) *Han takkede for Brødet, vi havde havt, ...* (C 308: 9)

〈彼は私たちが持っていたパンに感謝した,〉

- (15) ...*jorden, vi nu genfandt under sneen, var Vordingborg jord.* (D 53: 22-25)

〈…今や私たちが雪の下に再び見つけた土は Vordingborg の土であった。〉

- (16) ..., *selv om børnene, hun har bragt til verden, skal sulte;* (E 75: 1)

〈…彼女が産んだ子供たちがお腹を空かせることになるにもかかわらず,〉

- (17) *Stille gik hun ind og aabnede Brevet, Faderen havde lagt paa hendes Bord.*

(F 72: 2-3)

〈静かに彼女は入って行って, お父さんが彼女の机に置いておいた手紙を開けた。〉

- (18) *Det saas tydeligt paa hans ansigt, naar Claudine stod og undersøgte varerne, han kom med.* (G 28: 9-10)

〈それは, Claudine が, 彼が持ってきた品物を調べているときに, 彼の顔に明らかに現われた。〉

- (19) *Først tænkte han ikke over retningen han gik i, så...* (H 20: 2-3)

〈最初は, 彼は自分が歩いている方向について考えてはいなかった, すると…〉

- (20) *Det var en usædvanlig stille og smuk aften med en himmel fuld af stjerner og en lugt af æbler og efterår fra haverne han passerede.* (J 20: 23-25)

〈とても静かで, 満天の星空があつて, そして彼が通り過ぎた庭からりんごや秋の香りのする, とてもきれいな晩だった。〉

(21) *Drengen vi skød er sindssyg, derfor døde han.* (K 84: 1-2)

〈僕たちが撃った少年は気が狂っている、だから彼は死んだ。〉

4. まとめ

Andersen (2004: 25) は, Kristiansen *et al.* (1996: 112) を参考にして論を展開しているが, Kristiansen *et al.* (1996: 112) が一体何を参考にして, 「{名詞既知形+制限的關係節}は, 若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」という主張に至ったかはよく分からない. 筆者は, 幸運にも 2002 年の秋に Kristiansen *et al.* (1996: 112) の著者の一人でもある, コペンハーゲン大学北欧語学科の Frans Gregersen 教授の意見を伺う機会があり, その際に, 「{名詞既知形+制限的關係節}は若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」という主張について訊ねてみたところ, 同教授から実際に 7 名のギュムナシウムに通う生徒が書いた作文のサンプルを提示された. それらの作文を調べてみると, 7 名のうち, 問題の{名詞既知形+制限的關係節}を使用しているものは 2 名であった. さらに, その 2 名は, {名詞既知形+制限的關係節}のみを使用しているのではなくて, {指示代名詞+名詞+制限的關係節}も同時に使用していた. したがって, 制限的關係節における彼らの言語使用が{名詞既知形+制限的關係節}という構造に偏っているとは思えない. また, 2004 年 3 月に再び同教授にお会いすることができたので, §3 で示したように 19 世紀に書かれたデンマーク語のテキストにおいても, {名詞既知形+制限的關係節}が使用されていることを指摘したところ, 同教授は, そのような事実は確認したことがなく, 非常に興味深いと言われた. したがって, Kristiansen *et al.* (1996: 112) は, {名詞既知形+制限的關係節}の使用を現代の現象という枠でしか考えていないことが理解されるであろう. ただ, Kristiansen *et al.* (1996: 112) において, 彼らが §2 で確認したような文法書の記述を踏まえて, なおかつ「{名詞既知形+制限的關係節}は, 若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」と主張しているとすれば, 彼らの主張の意味は「{名詞既知形+制限的關係節}の使用は, 若者の間で増加傾向にある」ということになるのかもしれない.

いずれにせよ, {名詞既知形+制限的關係節}がデンマーク語において若者の使用に限定された構造ではなく, デンマーク語に一般に存在し, また存在してきた構造であると考えられることは, 上で確認したことから, 明らかである.

その結果, {名詞既知形+制限的關係節}の使用が{指示代名詞+名詞+制限的關係節}に比べて少ないという事実を, 「{名詞既知形+制限的關係節}は, 若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」ということをもって説明することは難しいと思われる. つまり, {名詞既知形+制限的關係節}の使用が比較的少ないことは, その使用が若者だけに限定されているからということではないと考

えられる。

{名詞既知形+制限的關係節}の使用頻度が比較的少ないことには、何か別の文法上の理由が存在するのではないと思われるが、その文法上の理由がどのようなものであると考えられるかについては、別の機会に論じることとしたい。

注

1. 先行詞が“定”であるものには、{固有名詞}、{所有代名詞／人称代名詞の所有格／名詞の所有格+（形容詞）+名詞}、{指示代名詞(denne/dette/disse)+（形容詞）+名詞}も含まれるが、本稿では議論の対象とはしない。
2. 新谷（1996: 129）では、{名詞既知形}は制限的關係節の先行詞としては{指示代名詞+名詞}に比べると、周辺的であり、主流ではないので、{名詞既知形+制限的關係節}の使用は避けるべきであると述べられている。
3. Thorborg (1996: 65): “Det led i hovedsætningen, som den restriktive relativsætning er knyttet til, har demonstrativt pronomen og ikke bekendt form. Altså ikke: Bøgerne, men: De bøger.”
4. 文中のイタリック体は筆者によるもので、{名詞既知形+制限的關係節}を示す。これ以降、デンマーク語の例文における{名詞既知形+制限的關係節}は全てイタリック体で示す。
5. 下線部は、デンマーク語の例文における{名詞既知形+制限的關係節}の日本語訳を示す。これ以降、デンマーク語の例文における{名詞既知形+制限的關係節}に対する日本語訳には下線を付す。
6. 新谷（1998: 79）において、既に同様のことが指摘されており、さらに Kristiansen *et al.* (1996: 112) の主張は事実ではないと考えられることも既に指摘されている。また、「{名詞既知形+制限的關係節}は若者の間で使用されるというある程度の傾向がある」と書いたが、ここで“若者の間”というのは、現代の若者の間で、という意味である。Kristiansen *et al.* (1996: 5) は *Dansk Sproglære* の前書きで、次のように書いている。
Bogen er skrevet med tanke på danskundervisningen i uddannelsessystemet, først og fremmest de gymnasiale uddannelser.
〈この本は、教育システムにおける、特にギムナシオムの教育における、デンマーク語教育を考慮して書かれている。〉
7. この例文の出典は、ユラン法（1271年）の第2条第46項である。
8. 太字で表されている年数は、作品・記事が発表された年、あるいは日記が書かれた年を示す。

9. *H.C.Andersens eventyr. Kritisk udgivet efter de originale Eventyrhæfter med Varianter ved Erik Dal og Kommentar ved Erling Nielsen.*の中から，以下の作品を対象とした。

- | | | |
|--------------------------------|---|--|
| 1. Lille Claus og store Claus. | 34. »Alt paa sin rette Plads! « | 64. Tolv med Posten. |
| 2. Den lille Idas Blomster. | 35. Om Aartusinder. | 65. De Visers Steen. |
| 3. Tommelise. | 36. Under Piletræet. | 66. Sneemanden. |
| 4. Den uartige Dreng. | 37. Den gamle Gravsteen. | 67. I Andegaarden. |
| 5. Reisekammeraten. | 38. Ib og lille Christine. | 68. Det nye Aarhundredes
Musa. |
| 6. Den lille Havfrue. | 39. Den sidste Perle. | 69. Iisjomfruen. |
| 7. Keiserens nye Klæder. | 40. »Hun duede ikke.« | 70. Psychen. |
| 8. Gaaseurten. | 41. Suppe paa en Pølsepind. | 71. Lygtemændene ere i
Byen, sagde Mosekonen. |
| 9. De vilde Svaner. | 42. Flaskehalsen. | 72. Sølvskillingen. |
| 10. Paradisets Have. | 43. Pebersvendens Nathue. | 73. Guldskat. |
| 11. Den flyvende Kuffert. | 44. »Noget.« | 74. Stormen flytter Skilt. |
| 12. Storkene. | 45. ABC-Bogen. | 75. Gjermt er ikke glemt. |
| 13. Ole Lukøje. | 46. Dynd-Kongens Datter. | 76. Portnerens Søn. |
| 14. Rosen-Alfen. | 47. Vinden fortæller om
Valdemar Daas og hans
Døttre. | 77. Flyttedagen. |
| 15. Lykkens Kalosker. | 48. Pigen, som traadte paa
Brødet. | 78. Sommergækken. |
| 16. Engelen. | 49. Taarnvægteren Ole. | 79. Moster. |
| 17. Nattergalen. | 50. Anne Lisbeth. | 80. Marionetspilleren. |
| 18. Den grimme Ælling. | 51. Børnesnak. | 81. Den gamle Kirkeklokke. |
| 19. Grantræet. | 52. Et Stykke Perlesnor. | 82. De smaa Grønne. |
| 20. Sneedronningen. | 53. Pen og Blækhuus. | 83. Nissen og Madamen. |
| 21. Elverhøi. | 54. Barnet i Graven. | 84. Peiter, Peter og Peer. |
| 22. De røde Skoe. | 55. »Deilig!« | 85. Vænø og Glænø. |
| 23. Den gamle Gadeløgte. | 56. En Historie fra Klitterne. | 86. Gudfaders Billedbog. |
| 24. Nabofamilierne. | 57. Metalsvinet. | 87. Dryaden. |
| 25. Lille Tuk. | 58. Venskabs-Pagten. | 88. Hønse-Grethes Familie. |
| 26. Skyggen. | 59. Bedstemoder. | 89. Hvad Tidselen oplevede. |
| 27. Det gamle Huus. | 60. En Historie. | 90. Hvad man kan hitte paa. |
| 28. Historien om en Moder. | 61. Den stumme Bog. | 91. Lykken kan ligge i en
Pind. |
| 29. Flipperne. | 62. »Ærens Tornevei.« | 92. Kometen. |
| 30. Klokken. | 63. Jødepigen. | 93. Ugedagene. |
| 31. Aarets Historie. | | |
| 32. Verdens deiligste Rose. | | |
| 33. Det er ganske vist! | | |

- | | | |
|----------------------------------|-----------------------------|------------------|
| 94. Solskins-Historier. | 96. Den store Søslange. | fortalte. |
| 95. Hvem var den
Lykkeligste? | 97. Gartneren og Herskabet. | 99. Portnøglen. |
| | 98. Hvad gamle Johanne | 100. Krøblingen. |

10. ただ、作品 A と B においては、{名詞既知形+制限的關係節}の使用をする割合が他の作品に比べて多い。作品 A と B はどちらも H. C. Andersen によるものであるので、{名詞既知形+制限的關係節}の使用が割合多いことは、彼の文体的な特徴に関連していると考えなければならない。
11. それぞれの作品の作者の出身地は以下のである。出身地については、<http://www.bibliografi.dk> を参考にした。

作品名	作者名	出身地
A	H.C.Andersen	Odense (フューン島に位置する都市)
B		
C	M.A.Goldschmidt	Vordingborg (シェラン島南部に位置する町)
D		
E	Herman Bang	Als (ユラン半島の東南に位置する島)
F		
G	Johannes Anker Larsen	Langeland (フューン島の東南に位置する島)
H	Hans Scherfig	København (コペンハーゲン)
I	Anders Bodelsen	København (コペンハーゲン)
J	Martha Christensen	Holsted (ユラン半島西南に位置する町)
K	Morten Hansen	Søllerød (コペンハーゲンの北に位置する町)

12. ページ数の前のアルファベットは作品名を示す。
13. ページ数の前のローマ数字は、*H. C. Andersens eventyr. Kritisk udgivet efter de originale eventyrhæfter med varianter ved Erik Dal og Kommentar ved Erling Nielsen.* の巻数を示す。
14. 「この関係詞 [= som : 筆者付記] は、関係節の主語にも目的語にもなる。目的語の場合、省略されることがある（いわゆる「制限的用法」で）。」（岡田ほか 1984 : 81）

APPENDIX

{名詞既知形+制限的關係節}を含む例文

本文で言及した 11 作品の中に見られる, {名詞既知形+制限的關係節}を含む例文を以下に示す. 作品ごとに例文を示し, 例文はそれぞれ次のように区別する.

①: 関係代名詞が省略されていない例文

②: 関係代名詞が省略されている例文

作品名を表すアルファベットは本文中のものに対応し, 例文中{名詞既知形+制限的關係節}に該当する部分は筆者がイタリック体とした.

(A) 作品 A における{名詞既知形+制限的關係節}

①: 関係代名詞が省略されていない例文

- (A 1) *Billedet som staar broget og stærkt for min Siæl*, maa jeg male for Menneskene ... (2: 10-11)
- (A 2) *Væsen som jeg ei ved det rette Navn paa* giv min Siæl Mod til at rive sig løs ... (3: 12-14)
- (A 3) *Ære er Sporen som driver min Digteraand* men ... (20: 12-13)
- (A 4) *Bonden som kiørte for os* bad om han maatte dreie ind og faae friske Heste ... (41: 1-2)
- (A 5) ... *i Vognen hvor jeg var*, sad en Hamborger ... (65: 16-17)
- (A 6) *Betjenten som førte os om*, forklarede om et: (151: 12-14)
- (A 7) Jeg er syg af *Scenevandet som Fremmede ikke godt taale*. (155: 1-2)
- (A 8) Den brogede Masse jeg havde seet svævede endnu for mig; Byerne vi om Aftenen fløj igjennem, det store Nonnekloster i Maaneskin, *Pigen der solgte mig Druer* og ... (184: 9-11)
- (A 9) Vi gik over *Pladsen hvor Fjeskos Huus har staaet* ... (194: 9-10)
- (A10) *Karlen som bar Tøjet ned* vilde have tre Frank ... (196: 3)
- (A11) Vi saae *Stedet hvor Laoceonsgruppen er funden*; (232: 14)
- (A12) ... jeg sagde da ogsaa om *Bonden der knælede for mig*: (236: 2-3)
- (A13) ... *Munken der fulgte os* saae ud som de. (237: 24-25)
- (A14) Paa Udgangs Billietten var trykket *Grækkerne der komme ud af Træhesten i Troja*. (266: 23, 267: 1)
- (A15) De arme Dyr foer da nu som vilde Dyr op ad Gaden og svandt mellem *Mængden der lukkede sig for dem*, som Vandet over Blyloddet. (299: 15-18)
- (A16) *Stedet hvor vore Pas bleve eftersete* var særdeles romantisk ... (310: 12)
- (A17) *Svanerne der trække den næste Vogn*, gjør lang Hals ... (321: 11-12)
- (A18) Her saae man *Stedet, hvor Orkestret havde været* ... (322: 18-19)
- (A19) Efterhaanden mærkede vi *Heden der kom op under os*. (325: 12-13)
- (A20) Jeg vandrede ene mellem de herlige Malerier medens mit Øre inddrak *Musikken, som toned nede fra Pladsen*. (388: 15-17)
- (A21) ... *Silketøiet der tages op af Kisterne* ere skuffende gjort. (400: 11-12)
- (A22) *Fabrikket hvor vi førtes om i*, havde flere Afdelinger. (402: 18-19)
- (A23) I Brixen fik vi den forønskede Kaffe og her saae jeg første Gang *Mennesket der sad*

bag ved mig ... (410: 16-18)

- (A24) *Maaden hvorpaa alle Lysene i et Moment tændtes i Klosterhallen* var superb. (428: 9-10)
- (A25) *Engelen der hviler paa Trappen* er deilig ! (467: 1)
- (A26) *Scenen i Geisteverdenen hvor man seer die Ahnenfrau, Hugo og flere,* var ret komisk. (477: 10-12)
- (A27) Et Metalkors i Rækværket ansaae jeg som *Stedet hvorfra han var styrtet ned.* (487: 17-18)
- (A28) *Manden som viiste os det,* havde store Schnurbarter ... (497: 2-3)
- (A29) *Studenten der af en anden havde hørt mit Navn,* spurgte om det var mig der stod Digte af i Chamissos Bog ... (508: 19-20)

② : 関係代名詞が省略されている例文

- (A30) Der var malet noget i *Bogen han fik op paa Cadedret ...* (56: 17)
- (A31) Alt fik samme Farve som *Glassene man saa igjennem.* (131: 7-8)
- (A32) Den brogede Masse jeg havde seet svævede endnu for mig; *Byerne vi om Aftenen fløj igjennem ...* (184: 9-10)
- (A33) *Maaden de udførte den paa* var ganske forunderlig ... (185: 8)
- (A34) Sonne førte os til Hertugens Lystslot og fortalte om den italienske Revoulution og *Jordskjelvet han havde oplevet i Luca ...* (208: 22-24)
- (A35) *Lampen man havde sat paa mit Værelse* manglede Olie og vilde ikke brænde ... (212: 6-8)
- (A36) *Puderne han hviler paa af rødt og guult Marmor* saa det hele seer meget naturligt ud ... (228: 1-2)
- (A37) *Bogen den ene holder* synes at være til; (231: 4-5)
- (A38) Løb med *Billietten, Thorvaldsen gav mig til Arcadien ...* (245: 21-22)
- (A39) *Stykket jeg saa igaar* havde den lange Tittel: (317: 1)
- (A40) *Tegningerne man har der af ere* meget lignende. (335: 14-15)
- (A41) *Bønderfruentimmerne vi mødte* vare smukt draperede med røde Kaaber. (363: 30, 364: 1)
- (A42) *I Porten vi kjørte ud af* var Helgener malede og Votivtavler ophængte. (380: 21-22)
- (A43) *Skotlænderen jeg havde seet i Rom og Neapel:* Andrew Jameson fra Edingburg fik Plads med Veturinen ... (407: 6-8)
- (A44) Min Reisemand fortalte om *Jernbanevognene han ogsaa havde beset ...* (449: 29-30)
- (A45) ... at hun strax havde mærket jeg var Kunstner, *paa Maaden jeg udtrykkede mig.* (454: 1-2)
- (A46) ... *Damen jeg første Gang paa Touren herud traf,* kom atter i Vognen ... (474: 2-3)
- (A47) ... og de brune Øjne stirrede ud i *Toneverdenen han skabte ...* (481: 1-2)
- (A48) *Kudskene vi fik* vilde ikke tage den fattige Dreng med ... (493: 23-24)

(B) 作品 B における {名詞既知形+制限の関係節}

① : 関係代名詞が省略されていない例文

- (B 1) ... de vare alle saa nydelige imod hende, især *Blomsterne, der havde ligget i hendes Seng;* (I 48: 26-28)
- (B 2) *Manden, som havde det lille Dukketheater,* blev saa fornøjet ... (I 73: 33-34)
- (B 3) *Manden, der havde gjort Comedien,* gik hen til sit lille Theater ... (I 74: 1-2)

- (B 4) *I Aaret, som kom*, var den ene af Søstrene 15 Aar ... (I 89: 6)
- (B 5) Og Kammerherrener gik og bar paa *Slæbet, som der slet ikke var*. (I 111: 9-10)
- (B 6) ... at *Natten, som kom*, muligt var den sidste hun havde at leve i; (I 137: 22 -23)
- (B 7) En ussel Hest trak *Karren, hvori hun sad*; (I 138: 4)
- (B 8) ... og han fortalte om *Storken, som bringer de søde smaa Børn*. (I 155: 19-20)
- (B 9) ... men først maa hver nummereres og *Hullerne, hvor de sidde deroppe*, maa nummereres ... (I 175: 18-19)
- (B 10) ... beskrev hende *Stedet, hvor Broderen havde dræbt ham og lagt hans Liig* ... (I 179: 13 -14)
- (B 11) Naar vi døde, sagde *Studenten, som min Kone vakser grovt for*, flyve vi fra den ene til den anden. (I 221: 34-36)
- (B 12) "Det varer saa længe med det ene Æg!" sagde *Anden, som laae* ... (II 31: 9-10)
- (B 13) "Ja, men han er for stor og for aparte!" sagde *Anden, som bed* ... (II 32: 24-25)
- (B 14) Han fortalte om *Laxen der sprang op mod de styrtende Vande naar Nøggen spillede paa Guldharpe*. (II 82: 21-23)
- (B 15) Det klare Solskin strømmede saa varmt gennem Vinduet ind i *Kirkestolen hvor Karen sad*; (II 90: 14-15)
- (B 16) "Jeg er een af Kjøgehøns!" og saa sagde den hvor mange Indvaanere, og om *Slaget der havde staaet*, og det var nu ikke noget at tale om. (II 126: 13-15)
- (B 17) Dit Navn skal med Roes flyve vidt ud om Verden, som *Skibet, der skulde have gaaet fra Corsøer* ... (II 128: 12-13)
- (B 18) ... Tornebusken sagde hende *Veien, som hun skulde gaae*. (II 161: 39-40)
- (B 19) ... og saa foer Historien fra Hønsehuus til Hønsehuus og tilsidst tilbage til *Stedet, hvorfra den egentlig var gaaet ud*. (II 234: 34-36)
- (B 20) Og *Hønen, som havde mistet den løse lille Fjeder*, kjendte naturligviis ikke sin egen Historie igjen ... (II 235: 3-5)
- (B 21) ... den afbrækkede Green stillede han hen mod *Stedet, hvor den var knækket af* ... (II 248: 8-9)
- (B 22) *Manden, som solgte dem*, indlogerede sig altid i Markedstiden hos den lille Knuds Forældre ... (II 262: 14-15)
- (B 23) Og han fandt *Huset, som han søgte* ... (II 264: 37)
- (B 24) ... han gik hen gennem *Gaden, hvor Johanne boede* ... (II 266: 12-14)
- (B 25) ... han løb gennem Gaderne, gik forbi *Huset hvor hun havde boet* ... (II 268: 13-15)
- (B 26) ... men *Indskriften der stod*, er næsten reent slettet ud. (II 288: 19-20)
- (B 27) *Folkene, som boede der*, dreve deres lille Avling ... (II 297: 6-7)
- (B 28) ... de laae ud for hvor *Manden, der hjalp med at pramme*, havde kun et kort Stykke hjem ... (II 298: 37-39)
- (B 29) ... jeg huskede paa *Manden, der tog en hvid Pind i Munden* ... (III 21: 2-4)
- (B 30) ... *Tougene, der holdt den*, skar man over ... (III 31: 28-31)
- (B 31) ... havde Husene i Gaden bygget et Huus for *Broderen, der var Muurermeste*, saa fik nu Gaden Navn efter denne ... (III 47: 34-35)
- (B 32) ... hun dukkede ned under Vandet for at plukke *Blomsten, som hun troede at see*. (III 65: 20-22)
- (B 33) Ole talte om *Skaalerne, der blev tømt ved Overgangen fra det gamle Dryp i det nye Dryp*, som han kaldte Aaret. (III 125: 12-14)
- (B 34) Nær ved *Bakken, hvor Frederik den Sjettes Slot ligger*, Oehlenschlägers Barndoms Hjem, skinner i Læ af Søndermarkens Skovgrund een af *Perlerne* ... (III 140: 16-19)

- (B 35) ... den kastede hende som Søen kaster *Skibet, der har mistet Ror og Styrer*.
(III 154: 2-3)
- (B 36) ... *Studene, som trak*, standsede imellem ... (III 179: 6)
- (B 37) ... *Matrosen, som Jørgen fulgte med*, lagde Veien gennem Kirken ... (III 181: 19-20)
- (B 38) Jørgen slog den Tale hen, sagde Farvel og gik til *Huset hvor Morten boede*;
(III 185: 33-34)
- (B 39) Og *Skibet der hang i Choret* dalede ned foran de To ... (III 197: 30)
- (B 40) ... thi *Glorien, som straaled fra Madonna, Jesus og Johannes*, bandt dem.
(IV 16: 18-21)
- (B 41) ... hun saae strax til *Væggen, hvor Hundens Drapperi skulde hænge* ... (IV 26: 1-2)
- (B 42) Og Fader fortalte om *Tyrkerne, der havde dræbt Barnets Forældre* ... (IV 33: 19-20)
- (B 43) Ulveskindene paa min Moders og Anastasias Seng havde jeg selv flaaet af *Dyret, der faldt for min Bøsse*. (IV 39: 8-10)
- (B 44) ... *Øieblikket, hvori al Sønderrivelse fra Ærens Tornevei – selv den ved egen Skyld – opløser sig i Lægedom, Sundhed, Kraft og Klarhed* ... (IV 62: 21-23)
- (B 45) *Fruen som var Herskab, eller han Herskabet til*, havde Melkeflaske med, som hun gav ham af; (IV 127: 19-22)
- (B 46) ... den muntre, leende Babette, deilig som *Foraaret der kom, Foraaret der lod alle Fugle synge om Sommertid, om Bryllupsdag*. (IV 148: 22-23)
- (B 47) Halvveis oppe laae *Pensionen, hvor Gudmoder boede*. (IV 150: 33-34)
- (B 48) ... og læse i Bogen om *Brudeparret, der i Aaret 1856 en Aftenstund seilede derover* ...
(IV 162: 24-25)
- (B 49) “Den maa jeg give ud i Mørke !” sagde *Manden, som havde den* ... (IV 199: 20)
- (B 50) *Dagene, som kom*, bragte ikke en Solstraale ! (IV 251: 25-26)
- (B 51) *Dukken, der spillede Keiserinde*, vilde udenfor Scenen ogsaa behandles som Keiserinde, for ellers kom hun ud af Øvelsen; (V 18: 22-24)
- (B 52) ... han var i høieste Naade taget op i den militaire Skole i *Afdelingen, hvor de finere Folks Børn vare* ... (V 24: 5-6)
- (B 53) ... i Nat kommer *Timen, da Vænø henter Glænø*. (V 45: 2)
- (B 54) Snart kommer *Træet, hvor jeg kan ryste Frugter*. (V 50: 17-18)
- (B 55) Hun kunde huske tilbage i *Tiden, da Træet var saa lille* ... (V 72: 6-7)
- (B 56) Dryaden følte en Angst, som *Qvinden, der i Badet har overskaaret Pulsaaren og forbløder* ... (V 89: 14-15)
- (B 57) ... og man kan nævne *Landet og Stedet, hvor Manden boede* ... (V 124: 2-3)
- (B 58) Og han talte om *Kometen, som var i Vente, Kometen, han havde seet som lille Dreng*.
(V 128: 8-9)
- (B 59) Hun kan fortælle om *Tiden, som gik, Minderne, der suse i det gamle Træ*.
(V 192: 21-22)

② : 関係代名詞が省略されている例文

- (B 60) Nu maatte Konen tage *Vinen frem, hun havde gjemt* ... (I 33: 15-16)
- (B 61) De flokkede sig nede i Vandet rundt om den grønne Stilk, der holdt *Bladet, hun stod paa* ... (I 55: 17-19)
- (B 62) ... og saa tog de *Pengene, Johannes gav dem* ... (I 71: 5)
- (B 63) ... *Pidsken, hun havde i Haanden*, saae ud, som den var en Solstraale; (I 76: 10-11)
- (B 64) ... og *Landene, de eiede*, strakte sig ... (I 96: 1)
- (B 65) ... og så roste han *Tøiet, han ikke saae* ... (I 109: 13-14)

- (B 66) Hun spurgte, om det var *Landet*, *hun skulde til* ... (I 132: 27-28)
- (B 67) Forskrækket søgte hun ind i Hulen, bandt *Nælderne*, *hun havde samlet og heglet*, i et Bundt og satte sig derpaa. (I 134: 12-14)
- (B 68) Han har bidt et Hul i *Palmesbladet*, *jeg gav dig* ... (I 146: 28-29)
- (B 69) I det han udtalte Ønsket, virkede *Kaloskerne*, *han havde taget paa* ... (I 220: 3-4)
- (B 70) De ligne *Kasserne*, *de staae i* ! (II 53: 2-3)
- (B 71) ... og saa fortalte han sin Kone om det gamle Huus, og den gamle Mand, og om *Tinsoldaten han sendte over til ham* ... (II 149: 28-30)
- (B 72) Ib talte til hende om *Veien*, *han søgte*; (II 305: 8-9)
- (B 73) Vandet drev fra *Sivmatten*, *hun havde om Livet* ... (II 311: 21)
- (B 74) ... *Sedlen*, *den havde baaret paa*, den var gaaet i Vasken. (III 30: 7-8)
- (B 75) *Æbletræet*, *de to Børn havde plantet*, voxede Aar for Aar ... (III 39: 10-11)
- (B 76) ... *Hesten han reed paa* blev ogsaa spoleret. (III 40: 37)
- (B 77) ... det var *Træet*, *han med Molly havde plantet som lille Kjerne*. (III 44: 1-2)
- (B 78) kunde hun da ikke bøje sig og bryde et Stykke af *Brødet*, *hun stod paa*? (III 116: 4-5)
- (B 79) ... og ikke at kunne naae *Brødet*, *hun traadte med sin Fod*! (III 116: 22-23)
- (B 80) *Skorpen*, *vi gaae paa*, holder sammen ... (III 122: 39 , III 123: 1)
- (B 81) ... *Fornøielsen*, *hun havde faaet*, var ikke stor ... (III 130: 32)
- (B 82) ... og Anne Lisbeth faldt forfærdeligt, saa at hun vaagnede ved det – og var lige ved at styrte om med *Stolen*, *hun sad paa* ... (III 131: 22-24)
- (B 83) ... og Alle ere vi dog kun *Instrumenterne Vor Herre spiller paa* ... (III 150: 34-35)
- (B 84) ...vender han sig, saa slaaer Du ham ihjel og tager *Pengene*, *han fik af mig*; (III 178: 19-21)
- (B 85) ... den Ældste talte om *Veien*, *de skulde tage* ... (IV 35: 12-13)
- (B 86) ... min Moder gjorde Ild, stegte *Løgene*, *hun bragte med* ... (IV 38: 5-6)
- (B 87) ... den er ikke saa smuk som *Roserne*, *hun har i Glasset* ... (IV 47: 1-2)
- (B 88) Her er *Nøkkrosen*, *han selv har plukket og vædet med salte Taarer* ... (IV 58: 23-24)
- (B 89) “Det henveirer!” raabte Faderen og greb om *Haanden*, *hun havde aabnet*. (IV 100: 1-2)
- (B 90) ... hun høre den, eller læse den engang, maaskee mellem *Kul-Indskrifterne*, *vi nys omtalte*. (IV 113: 22-24)
- (B 91) *Stuen* var større, *de boede i* ... (IV 130: 29)
- (B 92) ... saa maatte man see at støtte sig med Albuerne, klarmre sig fast med *Musklerne*, *man havde i Laar og Læg*; (IV 131: 36-37)
- (B 93) ... *Træstammen*, *han holdt sig ved*, var som savet over ... (IV 132: 37-38)
- (B 94) ... at udpege det Latterlige og Overdrevne i de fremmede Damers Paaklædning og *Maaden de gik paa* , og det var slet ikke for at gjøre Nar ... (IV 140: 1-3)
- (B 95) ... hans Ring var borte, *Bruderingen*, *Babette havde givet ham*. (IV 155: 19-20)
- (B 96) ... hun huskede *Ordene*, *hun havde talt*: (IV 162: 7)
- (B 97) Alverden skal læse *Brevene*, *hun faaer fra hendes Guldskat* ... (IV 218: 6-7)
- (B 98) “*Glæden*, *jeg fik*, var uendelig stor og velsignet!” (IV 228: 27)
- (B 99) Læser jeg en god Bog, et historisk Skrift, *Personen*, *jeg læser om*, maa jeg da altid tænke mig tilsidst ... (IV 248: 29-30)
- (B100) *Sæbevandet*, *jeg vilde vaske dem med*, for jeg var kommen med *Sæbevand* og *onde Hensigter*, vil jeg nu pidske og blæse i Skum ... (V 33: 19-21)
- (B101) Naar efter en Balnat vi halv vaagne kjøre hjem, klinger endnu tydeligt gennem vort *Øre Melodierne*, *vi hørte*, vi kunne synge dem hver og een. (V 88: 12-14)

- (B102) ... og der blev talt om *Blomsterbægeret, de bragte* ... (V 107: 5)
 (B103) *Huset, hun boede i*, var lille og net, men kjedeligt at see paa; (V 108: 19)
 (B104) *Rosen, den sad paa*, forstod det ikke ... (V 143: 11-12)
 (B105) ... da sad hun igjen i *Muddergroften, hun var kommen fra*. (V 210: 2)

(C) 作品 C における {名詞既知形 + 制限的關係節}

① : 關係代名詞が省略されていない例文

- (C 1) ... at man kun er som *Oldeborren, der er bunden ved en Traad*. (34: 13-14)
 (C 2) *Manden, der førte mig op til Spidsen af Domkirken*, antog mig for en Franskmand. (36: 28-29)
 (C 3) Men udenfor Friedberger Porten staaer Monumentet om *Hesserne, der faldt her under Stormen 1792*. (37: 23-25)
 (C 4) Paa Veien ret interessant Selskab, bl. A. *Hamburgeren, der antog mig for en Franskmand* ... (44 : 21-22)
 (C 5) I Theatret og saae "Der Zauberschleier", der handler om *Feen, der mister sit Slør og maa blive paa Jorden* ... (56: 21-23)
 (C 6) ... i Dogepalladset, hvor jeg saae *Stedet, hvor Marino Falieri blev henrettet* ... (60: 19-20)
 (C 7) *Schweitzeren, der har malet de smukke Genrebilleder*, hedder Muyden. (79: 23-24)
 (C 8) Forresten var jeg da ogsaa imorges i St. Pudentiana og saae den deilige Mosaik over Tribunen, besaae ligeledes Piazza Suburra og *Stedet, hvor Livia kjørte over sin Faders Lig*. (91: 23-26)
 (C 9) ... jeg saae den Søjle, ved hvilken Christus blev hudflettet, *Brønden eller Fordybningen, hvor Sta. Praxedes samlede Martyrernes Blod* ... (93: 1-3)
 (C10) Om aftenen hentede jeg Brevet, der var ankommet fra Dr. Ruge. (99: 24-25)
 (C11) ... jeg gik senere til Catacomberne, glædede mig over Henninghausen og over *Livet, der bølgede i mig* ... (101: 33-34)
 (C12) Vi kom desaarsag først afsted Kl. 7 og red paa Muuldyr op ad Klipperne til Tiberius's Pallads og *Stedet, hvor Folk bleve kastede ned*. (121: 1-3)
 (C13) Alt er eventyrlig rigt undtagen *Folket, der løber efter Vognen og betler*. (122: 9-10)
 (C14) ... besaae udenfor *Stedet, hvor Galleierne laa og Fiesco druknede*. (150: 15-16)
 (C15) Imorges besteg vi *Høien, hvorpaa Capucinerklostret ligger* ... (152: 25-26)
 (C16) ... *Foraaaret, som jeg her føler*, er ... (153: 18)
 (C17) ... det er sandt, at jeg ikke havde stor Nydelse af *Museet, hvori Bankieren Lombard Odier indførte mig*; (155: 27-29)
 (C18) *Bønderne der spurgte om Danmark*, lo af Glæde over Seiren ... (181: 1-2)
 (C19) ... saa vare Menneskene jo som *Granolunden, der bliver plantet tæt* ... (188: 13-14)
 (C20) ... *Grundene, hvorfor hun skulde sige Ja*, havde anført: (192: 6)
 (C21) ... det er overhovedet en mærkelig Respect for *Franskmændene som man træffer paa*. (202: 11-12)
 (C22) Tydskerne have ikke drevet det synderlig videre end til slige Ruiner, der ikke have levet. Saaledes *Huset, hvor der er Mærker af Kartætscheskud*. (203: 22-24)
 (C23) I Udstillingen saae jeg først lidt fra Nordamerika og saa den engelske Guldsmedekunst og Noget af den franske. Endvidere den store Mængde Modeller af engelske Skibe, *Værelset, hvori Alt til kirkeligt Brug forefindes* ... (239: 18-23)
 (C24) ... *Grunden, hvorfor en saa almindelig Fordærvelse herskede bl. Kvinderne i Yorkshire*

Fabriker var ... (273: 10-11)

- (C25) Tog saa til Field-Lane-ragged-school, hvor jeg fik *Sangene, der ere vedlagte*. (313: 22-23)
- (C26) ... og hørte en lesson af Mr. Shields om *Midlerne, hvorved man kan reussere i industriel Virksomhed*: (331: 30-32)
- (C27) I “Times” for idag en Artikel om Giver, Fonds o desl., testamenterede til Skolen og slet benyttede. *Maaden hvorpaa Krigen føres*. (345: 33-35)
- (C28) ... at have beholdt sin Hemmelighed, *Fangen, der gjerne vilde flyve bort*. (348: 31-33)
- (C29) Siegesbach kunde Stedet ogsaa hedde efter *Ridderen, som gik derfra med en Jomfru*; (369: 16-17)
- (C30) ... paa *Stedet, hvor den træder ud af Søen*, er en Bro slaet over den. (371: 26-27)
- (C31) Samtale om Forskjelligt, om *Maaden, hvorpaa man udvikler sig*. (373: 33-34)
- (C32) Nogle faa Skridt borte tilvenstre staaer *Bordet, hvor vi sad sidste Aften*. (383: 1-2)
- (C33) ... kom jeg i Samtale med *Pigen, der sørger for Skjænken hernede*. (387: 32-33)
- (C34) Venedig viste mig endnu engang sin Herlighed. Luftens Mildhed og Farverigdom. *Palazzo Pisani og Hallen hvor den sidste Fest for Napoleon blev given*. (405: 33-35)

②：関係代名詞が省略されている例文

- (C35) Han takkede for *Brødet, vi havde havt* ... (308: 9)

(D) 作品 D における{名詞既知形+制限的關係節}

①：関係代名詞が省略されていない例文

- (D 1) Men hvad var da *jødedommen, som jeg lærte*? (35: 29)
- (D 2) Moder ville vide, hvem *damen var, som kongen havde talt til* ... (57: 5-6)
- (D 3) ... *måden, hvorpå de blev vundet*, findes i En Almuefest ... (60: 35-36)
- (D 4) ... her var *stedet, hvortil min skolelærer i Vordingborg havde hentydet* ... (66: 16-18)
- (D 5) *Betalingen, der skulle ydes for skuddet*, glemte jeg ... (68: 33-34)
- (D 6) *Grunden, hvorfor jeg udhæver, at jeg husker dette skuespil*, er ... (77: 5)
- (D 7) ... thi *professoren, der eksaminerede*, H. N. Clausen, gav mig netop et spørgsmål af lærebogen. (104: 11-13)
- (D 8) ... *grunden, hvorfor han havde brækket benet*, var ... (119: 37-38)
- (D 9) Men *drengen, der havde redet stafet*, voksede op og blev postmester. (123: 17-18)
- (D10) *Tanken, som blev opgivet ham*, var ... (135: 6)
- (D11) ... *situationen, som jeg opdigtede, replikkerne, jeg lagde personerne i munden*, var mig så komiske ... (143: 24-26)
- (D12) ... det er vanskeligt at angive nøjagtig *forholdet, hvori det står til livet og dets sandhed*. (144: 16-18)
- (D13) ... det var *måden, hvorpå han, ifølge rygten, havde vundet medaljen for besvarelsen af Universitetets prisopgave om den franske poesis historie*. (162: 19-22)
- (D14) Thi samfundet er det omfattende, bevægelige, stille fremskridende eller det, som løfter sig formedelst skjult ideal uro, ligesom *dejen, der raskes, løfter sig formedelst “sporerne”*. (174: 3-6)
- (D15) Selv forlangte Møller, at et sådant brev skulle være glemt, som han selv glemte *humøret, hvori det var skrevet*. (178: 2-4)
- (D16) Ej heller har jeg ved denne lejlighed at fremstille mig selv som *frihedshelten, der*

frelste noget; (182: 31-32)

- (D17) Fra dette møde udgik i tidens løb to slags skandinavisme Ploug blev fører for den anskuelse, og *higen, der satte "vor nordiske fremtid" som formålet ...* (185: 9-11)
- (D18) Jeg kom pludselig til at huske artiklen "Falstaff som Konge" og den sindsstemning, den følelse af skyld, hvormed jeg havde modtaget *bogtrykkerdrengen, der bragte mig bladet*. (186: 11-14)
- (D19) Han brugte den stærke lignelse, at ligesom *skarpretteren, der afhuggede Ludvig XVI's hoved*, bad hovedet om forladelse ... (188: 29-31)
- (D20) ... men jeg beundrer *ordenen, der fører det hele ud i dets konsekvenser*. (198: 2-3)
- (D21) *Opgaven, som livet stiller*, er ikke, at ... (204: 7)
- (D22) Jeg har nævnt *illusionen, hvori jeg kom med hensyn til det jødiske væsen og dets betydning*. (204: 16-17)
- (D23) Skarpsynede folk kan af *måden, hvorpå ideen blev gjort tydelig*, afgøre ... (206: 26-27)
- (D24) *Bønnen, som i denne anledning siges i synagogen*, er: (209: 14-15)
- (D25) Fra *værkstederne i udlandet, hvor han havde arbejdet*, medbragte han sociale forestillinger ... (216: 23-24)
- (D26) ... *grunden, hvorfor jeg i erindringen får ham med netop nu*, er, at ... (218: 28-29)
- (D27) ... om *måden, hvorpå han tilbragte sine sidste øjeblikke*; (220: 26)
- (D28) Ved *måden, hvorpå han begyndte samtalen*, var denne tone straks slået an; (230: 7-9)
- (D29) ... en tid, hvori for mit vedkommende selve *måden, hvorpå jeg havde opgivet Corsaren*, indlagde lys og frejdighed ... (234: 9-11)
- (D30) Og *måden, hvorpå denne amnesti er indklædt* ... (255: 17-18)

② : 関係代名詞が省略されている例文

- (D31) ... *jorden, vi nu genfandt under sneen*, var Vordingborg jord. (53: 24-25)
- (D32) ... når *jorden, man går på*, således åbner sig omkring en med fjendtlighed ... (69: 30-31)
- (D33) Huset står for mig fra den tid som noget, jeg ikke følte anderledes end *luften, man indånder* ... (89: 17-18)
- (D34) ... *skuddet det gjaldt om*, var onkels eget. (112: 25)
- (D35) Der kom imellem os noget koket som mellem den forelskede og *genstanden, jeg begærer og vil drage til sig*; (166: 7-8)
- (D36) thi det nyttede ikke at tænke over *recepten, han havde givet* ... (226: 22-23)
- (D37) På grund af forventningen og *håbet, jeg havde sat til ham*, følte jeg mig så skuffet, at jeg næsten blev vred. (227: 21-22)

(E) 作品 E における {名詞既知形 + 制限的關係節}

① : 関係代名詞が省略されていない例文

- (E 1) ... han fortæller dem om *barnet der fødtes i Bethlehems krybbe*. (38: 9-10)
- (E 2) Han er altid *manden, manden, som begynder den nye uge med at komme drukken hjem efter at have soldet den gamles fortjeneste op*; (74: 27-29)
- (E 3) Først historien fra Slagelse om *moderen, der kaster sin fem børn i en mergelgrav og så drukner sig selv bagefter*. (96: 22-23)
- (E 4) Det næste blad. Historien fra Slagelse om *manden, der ikke ville gifte sig*. (99: 24-25)
- (E 5) ... men netop derfor vil *geniet, som må komme*, blive anklaget for usædelighed ... (100: 23-25)

- (E 6) De sidder bestandig i Øresundsforeningens vinduer og ser ud over sundet og spejder efter skibene, der bragte guld og skatte ... (105: 19-22)
- (E 7) ... syge og spedalske, dæmonbesatte og djævlbeherkede flokkedes om stenen, hvor den grusomme fader havde myrdet sin fromme datter. (122: 25-27)
- (E 8) ... pladsen er ikke stor – en plet jord som en tallerken, lige så lille som huset, der er bygget til 40 og mest må rumme over 70 små – (149: 32-34)
- (E 9) For der er nu præsterne, som kalder bibelen en hellig bog ... (160: 17-18)
- (E10) Men på alteret stod tømmermandssønnen, der vakte Lazarus af graven. (210: 5-6)
- (E11) Hvem kontrollerer den? Mon læreren, der låner Musset til femtenårs knøse? (215: 22-23)
- (E12) De har på stedet, hvor de syr, kost, varme og en krone om dagen ... (238: 24-25)
- (E13) Men hun har intet andet end synet af det grå hus, af tøjet, hvori hun fører den flittige nål evindeligt ud og ind ... (242: 15-17)
- (E14) ... mens vi betragter malerierne, der tjener til skilt: (246: 11-14)
- (E15) Dagen, der kommer, vil vise en forkullet, takket ruin. (265: 7)

②：關係代名詞が省略されている例文

- (E16) ... selv om børnene, hun har bragt til verden, skal sulte; (74: 29 , 75: 1)
- (E17) ... man tænker ikke på tårerne, dette rum har brudt vej for. (208: 21-22)

(F) 作品 F における{名詞既知形＋制限的關係節}

①：關係代名詞が省略されていない例文

- (F 1) Det var Tiden, hvor Dukkerne kom frem. (17: 1)
- (F 2) Efter Jul kom Tiden, hvor der læstes. (26: 33)
- (F 3) Hun kendte Pletterne, hvor de voksede ... (56: 34)
- (F 4) Det var fra Døtrene fra Godset, hvor hun var opdraget. (83: 9-10)
- (F 5) Det var fra Aarene, da han færdedes paa Universitetet endnu. (118: 28-29)
- (F 6) ... pludselig gav hun sig til at tale om Hoffet og Arveprinsessen, som hun sagde, hun havde besøgt igaar: (121: 24-26)
- (F 7) ... mens Stolen, til hvilken han støttede sig, rystede under taget af hans Haand ... (123: 12-13)
- (F 8) Rynkerne, der dækkede Frøken Erichsens Ansigt som Gittermasken Fægterens, sitrede et Øjeblik. (133: 22-23)
- (F 9) Og de begyndte at tale om dem alle dernede, om Præsten og hans langbenede Datter; om Godsforvalteren og de rødhaarede Pigebørn, som altid gik i ens Kjoler syede af ét Stykke, og Alleen der gik op til Gaarden, og hvor de altid gik paa Stylter: (152: 3-7)
- (F10) Hans Excellences Blik havde strejft Manden, der talte: (164: 18)
- (F11) Hans Excellences Hænder var saa kolde som Jernet, hvorom de tog, mens han aabnede Skabets Dør. (194: 27-28)

②：關係代名詞が省略されている例文

- (F12) Stille gik hun ind og aabnede Brevet, Faderen havde lagt paa hendes Bord. (72: 2-3)

(G) 作品 G における{名詞既知形+制限的關係節}

① : 關係代名詞が省略されていない例文

- (G 1) Lidt efter hørte hun dem komme igen sammen med Claudines børn, som vilde se *stedet, hvor det var sket*. (40: 39-40)
- (G 2) I det samme begyndte grevinden at gaa langsomt henimod *bænken, hvor Marie sad*. (53: 35-36)
- (G 3) Derefter fløj hans navn over landet paa en prædikensamling om *lykken, som ikke kan undgaas*. (85: 26-27)
- (G 4) Da besluttede hun en dag at gemme det som et minde om ham og om *tiden, da han stagede dem i prammen ...* (97: 3-4)
- (G 5) Hun ønskede at mærke saa lidt som muligt til *stedet, hvor hun var ...* (158: 21-22)
- (G 6) Den Jesus, der havde hendes hjerte, var *manden, der vandrede under aaben himmel og ved selve sin væren vidnede om alles fader*. (171: 22-24)
- (G 7) Han stirrede hen mod *stolen, hvor hans første hustru plejede at sidde med sit strikkesøj*. (185: 36-37)

② : 關係代名詞が省略されている例文

- (G 8) Det saas tydeligt paa hans ansigt, naar Claudine stod og undersøgte *varerne, han kom med*. (28: 9-10)
- (G 9) Hun stod og saa ud ad vinduet over *landsbyerne, de kørte forbi*. (49: 39-40)
- (G10) Og i *eftertrykket, han lagde paa det*, følte hun hele afstanden. (50: 18-19)
- (G11) *Mælken, vi selv skummede*, var da til at bruge. (92: 29)
- (G12) Hun sad og hørte, og baade det, han sagde, og *maaden, han sagde det paa ...* (104: 20-21)
- (G13) ... saadan i sit væsen, der minder hun minsandten om Marie og ogsaa i *maaden, hun gør alting paa ...* (150: 28-30)
- (G14) Hun fortalte om den lille kløver, om *græsverdenen, hun havde været inde i*, og om *brevene, hun fik fra kløveren*, som var død og borte i “intetsteds”. (167: 41 , 168: 1-2)
- (G15) *Apoteket, de alle saa hen til som slægtens faste borg*, er allerede paa fremmede hænder. (238: 35-36)
- (G16) ... men *trøsten, de gamle digtere bragte ham*, var næsten graverende god. (239: 32-33)

(H) 作品 H における{名詞既知形+制限的關係節}

① : 關係代名詞が省略されていない例文

- (H 1) Og så kom *tiden, da han kunne få stilling og indtægter og eget liv*. (26: 31-32)
- (H 2) Og nu er *tiden kommet, da man kan gå til bords*. (40: 5)
- (H 3) Og skovens indfødte – *mændene, som arbejder i drivhuset* – er fredelige og overfalder ikke de hvide mænd. (70: 26-27)
- (H 4) Så må Jørgen give efter og udtale *ordet, som hans far vil have*, og ... (78: 23-24)
- (H 5) *Tiden er kommet, hvor man skal til at bekræfte sit dåbsløfte og optages i den kristne menighed*. (121: 28-29)
- (H 6) For kolleger som for disciple var han *vennen, som man havde fuld tillid til*. (148: 7-9)
- (H 7) Og hvad er *camoenen, som fyldte hans bryst?* (161: 19-20)
- (H 8) Og så holder rektor sin tale om *året, der er svunget*, og ... (171: 24-25)

(I) 作品 I における{名詞既知形+制限的關係節}

①：關係代名詞が省略されていない例文

- (I 1) Mens han venter på *stemmen som skal fortælle ham at han har bestilt vækning og klokken er otte* betragter han isblomsterne bag et gardin, som han uden at tænke over det har trukket til side. (5: 3-6)
- (I 2) ...og Bruno sagde, at i fremtidens samfund – og sådan set allerede nu – hørte *manden der kunne fortælle en god historie hjemme i de allerøverste indtægtsklasser*. (10: 24-26)
- (I 3) Samtalen gik i stå på den korte tur til *opgangen hvor hun skulle af*. (11: 26-27)
- (I 4) Den opslåede, glemte jernalen, og *patienten, der ligger og kigger hen på den*. (29: 7-8)
- (I 5) Han opdager at der er hæftet en lille klokke til *puden hvor hans hoved hviler* og han trykker på den. (62: 9-10)
- (I 6) ... og *maskineriet der skulle holde øje med det* er så overbelastet ... (102: 33-34)
- (I 7) Vi besøger Ackermann-centret og kaster et blik på *damen, som nok er lidt blå i kinderne*. (108: 3-5)
- (I 8) *Sygeplejerskerne som så til mens han tog sine bade* lignede alle hinanden og ... (130: 20-21)
- (I 9) Det gik op for Bruno, at Ackermann ikke længere tydeligt huskede *ordene, som havde hørt til i 1998*. (152: 30-31)

②：關係代名詞が省略されている例文

- (I10) ...men han kunne stadig lytte sig til *retningen den tog* ... (6: 28-29)
- (I11) Først tænkte han ikke over *retningen han gik i*, så ... (20: 2-3)
- (I12) ...og han er alene, der er ikke nogen til at lytte til *sætningen han ikke siger*. (59: 4-5)
- (I13) Der var en smal, øde klitstrækning mellem havet og *huset, han var blevet installeret i*. (89: 26-27)
- (I14) En dag så han på sit sæbestykke og opdagede, at *telefonnummeret han havde ridset i det med neglen* var væk. (95: 19-21)
- (I15) På væggen i sit værelse studerede Bruno af og til *nummeret han havde ridset med en negl, og som han hurtigt havde lært udenad*. (98: 1-3)
- (I16) Bruno bildte sig ind, at det ikke bare var årene, men også *barnet hun havde født*. (109: 33-34)
- (I17) “Gevær”, sagde Bruno, skønt *instrumentet han havde set ikke lignede geværene som hørte hans barndom til*. (123: 14-15)
- (I18) “Nu må vi standse hende”, sagde Ackermann, gjorde sin håndbevægelse igen og gik hen til en vægtefon for at afgive en hurtig besked på *sproget Bruno ikke forstod*. (140: 33-34, 141: 1)
- (I19) Projektørstrålen hvilede på Ackermann og nogen råbte til ham på *sproget Bruno ikke forstod*. (142: 9-11)

(J) 作品 J における{名詞既知形+制限的關係節}

①：關係代名詞が省略されていない例文

- (J 1) Og havde på hjemvejen allerede anbragt Gitte og sig selv i stuen med kaffekopperne og døren på klem ind til *værelset hvor barnet sov*. (11: 11-13)
- (J 2) ... og der var en kold foragt i øjnene og en trækning om munden, der ligesom gjorde

opmærksom på *stedet*, hvor de opholdt sig ... (70: 6-8)

(J 3) Han begyndte at krigle rundt efter arbejdstid i *kvarteret*, hvor han boede. (85: 11-12)

② : 関係代名詞が省略されている例文

(J 4) Det var en usædvanlig stille og smuk aften med en himmel fuld af stjerner og en lugt af æbler og efterår fra *haverne han passerede*. (20: 23-25)

(J 5) ...før eller siden blev de alligevel nødt til at sende hende tilbage til *anstalten hun kom fra* ... (106: 9-11)

(K) 作品 K における {名詞既知形 + 制限的關係節}

① : 関係代名詞が省略されていない例文

(K 1) ... så jeg hjalp med at rydde op, *pigen der havde holdt det*, kunne slet ikke overskue det. (12: 5-6)

(K 2) Alle folk var så flinke herude, de andre ved bordet, *manden der havde hjulpet mig*, alle. (69: 26-28)

(K 3) De bløde hække fortsatte, men de lukkede ikke en ude, de var bare indbydende, ligesom *piletræerne der hang ud over vejen* ... (163: 10-12)

② : 関係代名詞が省略されている例文

(K 4) *Drengen vi skød* er sindssyg, derfor døde han. (84: 1-2)

(K 5) ... jeg fandt ud af at *damen jeg sad ved siden af* var Mettes mors søster ... (116: 23-24)

(K 6) Det ødelagde fuldstændig *harmonien jeg havde følt lige før* ... (153: 19-20)

Om brugen af restriktive relativsætninger med et substantiv i bestemt form som korrelat i dansk

Rie Obe

Resumé

I denne artikel vil jeg diskutere brugen af restriktive relativsætninger med et substantiv i bestemt form som korrelat i dansk. I dansk findes der to måder at bestemme et korrelat i forbindelse med restriktive relativsætninger på, dvs. {demonstrativt pronomen + substantiv}, og {substantiv i bestemt form}, når korrelatet ikke har nogen adjektiver med. De to former forekommer ikke med samme

hyppighed. {demonstrativt pronomen + substantiv + restriktiv relativsætning} (forkortes som {DEN + R}) bruges hyppigere end {substantiv i bestemt form + restriktiv relativsætning} (forkortes som {-EN + R}).

Om {-EN + R} nævner Diderichsen (1970) og Fischer-Hansen & Kledal (2001) ikke noget. Desuden anbefaler Thorborg (1996: 65) {DEN + R} stærkt og opfatter ikke {-EN + R} som konstruktion for en restriktiv relativsætning. Derimod kommer Kristiansen *et al.* (1996) med en interessant bemærkning om {-EN + R}:

Der er i gymnasieelevers og andre unges skriftlige dansk en vis tendens til at bruge bestemt form også når der er tale om en restriktiv relativsætning: ‘I det første fortumlede års tid var der endnu mulighed for at mødes med dissidenterne han sad i fængsel med...’ (sammenlign: ‘... de dissidenter han sad i fængsel med’) (Kristiansen *et al.* 1996: 112)

De mener at {-EN + R} bruges blandt de unge. Under henvisning til deres bemærkning nævner Andersen (2004) også om brugen af {-EN + R}:

Omvendt findes der, som retningslinje, for de restriktive relativsætninger en regel om at foranstillet bestemt artikel på det substantiv som relativsætningen lægger sig til, angiver at der er tale om en restriktiv relativsætning, men der har vist sig (se Frans Gregersen i Dansk Sproglære 1996, s 112) en tendens hos unge mennesker til her ikke at skelne mellem foranstillet og efterstillet artikel; (Andersen 2004: 25)

Kan man desuden forklare at {-EN + R} bruges sjældnere end {DEN + R} fordi {-EN + R} bruges blandt de unge? Men er deres bemærkninger i virkeligheden rigtig?

I det følgende nævner jeg først nogle grammatiske beskrivelser der handler om {-EN + R}, og derefter forsøger jeg at vise at man kan finde {-EN + R} i de danske tekster fra perioden 19. årh. — 20. årh., og at det er vanskeligt at forklare hyppighedsforskellen mellem de to former efter Kristiansen *et al.* og Andersens bemærkninger.

Der findes nogle bemærkninger om {-EN + R} i andre danske grammatikbøger og grammatiske artikler. Blandt dem er der nogle beskrivelser fra for ca. 100 år siden. Følgende beskrivelse hos Mikkelsen (1975 (1911)) er et eksempel på disse:

Den bestemte form eller det bestemte kendeord står undertiden i stedet for det påpegende henvisningord *den*. Dette finder især sted foran henførelses-bisætninger, f. eks. Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt (for de penge, han dengang fik). (Mikkelsen 1975 (1911): 192)

I Lefolii (1906) finder vi en lignende beskrivelse:

..., nemlig enten uden nogen som helst bestemmelse eller med det simple pegeord “den, det, de” pegende hen på det andet udsagn – undertiden findes isteden herfor et navneord i bestemmelsesform; “Det er nu meget bedre med mine knæer; i den sidste uge har jeg for det meste kunnet rejse mig fra stolen jeg har siddet på, ikke blot uden andres hjælp, men også uden at støtte mig med albuen til bordet jeg har siddet ved.” (Lefolii 1906: 131)

Desuden nævner Hansen (1927) om {-EN + R}:

Denne form for bestemthed forekommer ogsaa, om end sjældnere end den anaforske og den stituationsbestemte, i det ældste lovsprog: bondœn thœr ham fœller (Hansen 1927: 48)

Eksempelsætningen hos Hansen (1927) er fra Jyske Lov i 1241. Det betyder at {-EN + R} allerede kunne bruges for ca. 700 år siden.

Blandt artiklerne i vore dage nævner Pedersen (1988) og Jacobsen (1994) {-EN + R}. Pedersens bemærkning er:

Danish favours demonstrative + noun when followed by a restrictive relative clause, rather than noun + enclitic article + relative: ‘den mand, jeg så’ rather than ‘manden, jeg så’. However, in my material there are several examples of the latter construction. As similar examples do occur in original Danish texts it is impossible to say to what extent their occurrence in translation is determined by the form of the SL utterance, but it is obvious that influence from other languages, notably English and French, is at the moment helping this construction to spread : (Pedersen 1988: 52-53)

Til hans bemærkning har Jacobsen (1994) en anden holdning:

Bedømmelsen af de nævnte konstruktioner har primært relevans i tekster der er oversat fra engelsk og her vil der utvivlsomt blive slået hårdt ned på dem. I det omfang lignende konstruktioner forekommer i tekster der ikke har engelsk forlæg, og som i øvrigt ikke er præget af anglicismer, må de formentlig betragtes som genuine danske konstruktioner, som der naturligvis ikke er grund til at gribe ind over for. (Jacobsen 1994: 17)

Hverken Pedersen eller Jacobsen beskriver at {-EN + R} kun bruges blandt de unge. Og Pedersen tyder på at {-EN + R}s brug vinder frem på grund af engelsk eller fransk påvirkning. Hans beskrivelse kan være et tegn på at {-EN + R} bruges normalt, ikke kun blandt de unge, i dansk. Yderligere viser selve diskussionen om {-EN + R} mellem Pedersen og Jacobsen at {-EN + R} ikke specielt er de unges sprogbrug.

For at undersøge forholdet mellem {DEN + R} og {-EN + R} i de danske tekster

fra perioden 19. årh. — 20. årh. har jeg samlet eksempelsætninger fra følgende 11 bøger.

	{DEN + R} + {-EN + R}	{DEN + R}	{-EN + R}
A	98	50 (51%)	48 (49%)
B	276	171 (62%)	105 (38%)
C	144	108 (76%)	36 (24%)
D	224	187 (83%)	37 (17%)
E	62	50 (81%)	12 (19%)
F	96	80 (83%)	16 (17%)
G	150	134 (89%)	16 (11%)
H	68	60 (88%)	8 (12%)
I	77	58 (75%)	19 (25%)
J	54	49 (91%)	5 (9%)
K	56	50 (88%)	6 (12%)

- Henvisninger til de ovenstående 11 bøger -

- A : Andersen, H. C. 1971. *H. C. Andersens Dagbøger*. [dagbøgerne mellem 1825 og 1834]
 B : Andersen, H. C. 1963-1990. *H. C. Andersens eventyr*. [eventyrerne mellem 1835 og 1872]
 C : Goldschmidt, Meir. 1987. *M. A. Goldschmidts Dagbøger*. [dagbøgerne mellem 1843 og 1874]
 D : Goldschmidt, Meir. 1964 (1877). *Livs Erindringer og Resultater*.
 E : Bang, Herman. 1983. *Reportager*. [artiklerne mellem 1879 og 1897]
 F : Bang, Herman. 1997 (1898 / 1901). *Det hvide hus Det graa hus*.
 G : Larsen, Johannes Anker. 1925. *Martha og Maria*.
 H : Scherfig, Hans. 1940. *Det forsømte forår*.
 I : Bodelsen, Anders. 1969. *Frysepunktet*.
 J : Christensen, Martha. 1989. *Manden, som ville ingen ondt...* .
 K : Hansen, Morten. 2000. *Søllerød blues*.

Som man kan se ovenfor, kunne jeg finde {-EN + R} i alle de 11 bøger (og alle

de eksempelsætninger står i APPENDIX). Desuden har det vist sig at {DEN + R} bruges hyppigere end {-EN + R} på trods af forskellene mellem A-K. I hvert fald viser dette resultat tydeligt at {-EN + R} allerede kunne bruges i 19. årh.

I nærværende artikel har jeg hidtil beskæftiget mig med brugen af {-EN + R} i dansk, men ved bemærkningen om {-EN + R} af Kristiansen *et al.* (1996: 112), dvs. {-EN + R} bruges blandt de unge i dansk, sætter jeg spørgsmålstegn på grund af de andre grammatiske beskrivelser om {-EN + R} og min undersøgelse om brugen af {DEN + R} og {-EN + R} i de danske tekster fra perioden 19. årh. – 20. årh. Desuden kan det være vanskeligt at forklare hyppighedsforskellen mellem {DEN + R} og {-EN + R} med at {-EN + R} er de unges sprogbrug. Til hyppighedsforskellen mellem de to typer er der sikkert nogle grammatiske årsager, men det vil jeg diskutere en anden gang.

参 考 文 献

- Andersen, Nina Møller. 2004. "Kan man oversætte et komma?", *På godt dansk: festskrift til Henrik Galberg Jacobsen i anledning af hans 60 års fødselsdag 4. februar 2004*, 23-29. København: Wessel og Huitfeldt.
- Diderichsen, Paul. 1970. *Elementær dansk Grammatik*. 3.udg. København: Gyldendal.
- Fischer-Hansen, Barbara & Ann Kledal. 2001 (1994). *Grammatikken – håndbog i dansk grammatik for udlændinge*. 2.udg. København: Special-pædagogisk Forlag.
- Hansen, Aage. 1927. *Bestemt og ubestemt substantiv. Bidrag til dansk substantivsyntaks. I*. København: Arnold Busck.
- Jacobsen, Henrik Galberg. 1994. "Sprogændringer og sprogvurdering. Om nogle aktuelle engelskinspirerede ændringer i dansk og om vurdering af dem", *Danske Studier* 1994, 5-28. København: C. A. Reitzels Forlag.
- Kristiansen, Tore, Frans Gregersen, Erik Møller & Inge Lise Pedersen. 1996. *Dansk sproglære*. 1.udg. København: Dansklærerforeningen.
- Lefolii, Hans Henrik. 1906. "Strøtanker, navnlig om vore relativformer", *Danske Studier* 1906, 113-138. København: C. A. Reitzels Forlag.
- Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk ordføjningslære*. København: Hans Reitzels Forlag.
- 岡田令子・菅原邦城・間瀬英夫. 1984. 『現代デンマーク語入門』. 東京: 大学書林.
- Pedersen, Viggo Hjørnager. 1988. *Essays on Translation*. København: Erhvervs-

økonomisk Forlag S / I. Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck.

新谷俊裕. 1996. 「デンマーク語における名詞の既知形を先行詞とする制限的關係節について」, IDUN 12 号, 105-148. 大阪：大阪外国語大学 デンマーク語・スウェーデン語研究室.

———. 1998. 「Den mand der kalder sig Alvard vs. Manden der ville være skyldig — デンマーク語の小説の題名と制限的關係節の先行詞の限定方法について —」, IDUN 13 号, 55-88. 大阪：大阪外国語大学 デンマーク語・スウェーデン語研究室.

Thorborg, Lisbet. 1996. *Dansk grammatik i praksis 1. Øvelser i verber og sætningsbygning*. 4. oplag. København: Akademisk Forlag.

例 文 出 典

Andersen, H. C. 1963-1990. *H. C. Andersens eventyr. Kritisk udgivet efter de originale Eventyrhæfter med Varianter ved Erik Dal og Kommentar ved Erling Nielsen*. bd.1-bd.5. København: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab.

———. 1971. *H. C. Andersens Dagbøger. I*. København: G. E. C. Gad Forlag.

Bang, Herman. 1983. *Reportager*. København: Gyldendal.

———. 1997. *Det hvide hus Det graa hus*. København: Samleren.

Bodelsen, Anders. 1969. *Frysepunktet*. København: Gyldendal.

Christensen, Martha. 1989. *Manden, som ville ingen ondt...* København: Forlaget Per Kofod.

Goldschmidt, Meir. 1964. *Livs Erindringer og Resultater*. København: Jespersen og Pios Forlag.

———. 1987. *M. A. Goldschmidts Dagbøger*. København: C. A. Reitzels Forlag.

Hansen, Morten. 2000. *Søllerød blues*. København: Borgen.

Larsen, Johannes Anker. 1925. *Martha og Maria*. København: Gyldendal.

Scherfig, Hans. 1940. *Det forsømte forår*. København: Gyldendal.